

博多 118

—博多遺跡群第157次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第988集

2008

福岡市教育委員会

博多 118

—博多遺跡群第157次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第988集



遺跡略号 HKT-157
調査番号 0560

2008

福岡市教育委員会



第Ⅱ面全景（東から）



SX223 人骨検出状況



SE24 下底出土犬骨



SC208 遺物出土狀況

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術や文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、各時代とも重要視されているところです。

本調査地点は中世における国際貿易都市として全国でも特に繁栄を極めた博多遺跡群に含まれています。今回の調査では中世の遺構ばかりではなく、古代や古墳時代初頭の住居跡や遺物が発見され各時代の生活空間の利用を考察する上で重要な資料となりました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例 言

1. 本書は福岡市博多区祇園町83番外地内において福岡市教育委員会が2005年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面は藤野雅基、荒牧が作成し、遺構写真撮影は荒牧が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、相原聰子、荒牧、淨書は濱石正子、大石菜美子、相原聰子、荒牧が行った。
5. 本文は荒牧が執筆、編集した。
6. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた全ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、公開・活用されていく予定である。

凡 例

1. 本書掲載の遺構図座標、方位は旧日本測地系（第II系）による。方位は真北より $0^{\circ}19'$ 西偏する。
2. 掲載した遺物は土器、石器、金属器等の各種別に通し番号を付した。

遺跡調査番号	0560		遺跡略号	HKT-157	
地 番	福岡市博多区祇園町183番外		分布地図番号	49（天神）	
開発面積	364m ²	調査対象面積	約291m ²	調査面積	230m ²
調査期間	平成18年1月10日～平成18年4月12日				

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 調査体制	1
II.位置と環境	
1. 地形	1
2. 既往の調査成果から	1
III.遺構と遺物	
1. 土層	2
2. 調査の概要	2
3. 第Ⅰ面、第Ⅱ面の調査	8
SD41	8
SE24	8
SE20	10
SE126	10
SE117	11
SE120	11
SE237	12
SE278、SE298	12
SK22	12
SK90	12
SK304	12
SX57	16
SK169	17
SK177	17
SK178	17
SX40	17
SX94	17
SX223	23
SX157	23
4. 第Ⅲ面の遺構	27
SC208	27
SX217	27
SX206、207	27
SX246	29
鉄器	29
銅鏡	31
その他の遺物	31
表採・搅乱出土遺物	31
IV.おわりに	33
V.福岡市博多遺跡群第157次調査出土の中世人骨	37

挿図目次

- | | |
|------------------------------------|--|
| Fig.1 博多遺跡群と周辺遺跡 (1/10万) ……目次 | Fig.17 SK304出土遺物実測図 (1/4)18 |
| Fig.2 第157次調査範囲と位置図 (1/300) ……2 | Fig.18 第I面土壤出土遺物実測図 (1/4) ……21 |
| Fig.3 博多遺跡群調査地點 (1/8,000)3 | Fig.19 土器集中40,58,94
出土遺物実測図 (1/4) ……23 |
| Fig.4 第I面遺構配置図 (1/100)5 | Fig.20 SX223 人骨実測図 (1/40)24 |
| Fig.5 第II面遺構配置図 (1/100)7 | Fig.21 第I、II面遺構
出土遺物実測図1 (1/4) ……25 |
| Fig.6 第III、IV面遺構配置図 (1/100)9 | Fig.22 第I、II面遺構
出土遺物実測図2 (1/4) ……26 |
| Fig.7 SD41出土遺物実測図 (1/4)10 | Fig.23 第I、II面遺構
出土遺物実測図3 (1/4) ……27 |
| Fig.8 SD41土層断面図 (1/40)10 | Fig.24 第III面(褐色砂)
出土遺物実測図 (1/1)28 |
| Fig.9 SE24井筒内犬骨平面図 (1/40)11 | Fig.25 第III面遺構出土遺物実測図 (1/4)28 |
| Fig.10 第I面井戸出土遺物実測図1 (1/4) ……13 | Fig.26 SC208実測図 (1/40)29 |
| Fig.11 第I面井戸出土遺物実測図2 (1/4) ……14 | Fig.27 SX217 (灰跡) 実測図 (1/40)29 |
| Fig.12 SK22実測図 (1/40)15 | Fig.28 SC208出土遺物実測図 (1/4)30 |
| Fig.13 SK22出土遺物実測図 (1/4)15 | Fig.29 SC238実測図 (1/60)31 |
| Fig.14 SK115、234実測図 (1/60)16 | Fig.30 SX206, 207 (SC208周辺)
出土遺物実測図 (1/4)32 |
| Fig.15 SK115出土遺物実測図 (1/4)17 | Fig.31 SX246出土遺物実測図 (1/4)32 |
| Fig.16 SK304実測図 (1/40)18 | Fig.32 出土鉄器実測図 (1/4)32 |

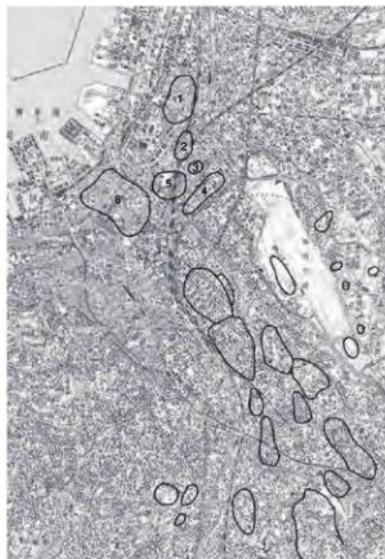


Fig.1 博多遺跡群と周辺遺跡 (1/10万)

I. はじめに

(1) 調査に至る経過

平成17年9月7日、株式会社ビルホームよりオフィスビルの建築に伴い福岡市博多区祇園町183番、184番、185番、227番地内における「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」の文書が埋蔵文化財課に提出された。これを受理し、当課で書類審査を行った。当該地は別の申請により平成2年4月18日に確認調査を行い、遺構を確認していた。そのため、今回の遺構面に達する掘削を伴う工事計画に対し発掘調査を前提とした協議に入った。調査期間や予算等の協議が進み、発掘調査の条件整備や契約が整い次第、発掘調査を行うはこびとなり平成18年1月10日から調査を開始した。

調査は年度をわたり平成18年4月12日に終了した。

(2) 調査の方法と経過

調査より先に杭打ちと矢板が設置されていた。廃土処理の関係から調査範囲を2分割し、南西部を先に表土剥ぎし、発掘を進めた。表土や発掘調査による廃土を北東側から搬出していく必要から、北東側に撤去が容易なテントを休憩場として設置し、作業スペース、廃土置き場として用いた。

南西側の調査が終了し、北西側の調査を開始したが、重機による表土剥ぎは掘削予定範囲の際までは不可能であったので、矢板より約2m程度ひいた調査範囲となった。

(3) 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

【調査主体】福岡市教育委員会 【調査総括】埋蔵文化財第1課長 山口譲治 調査第2係長 山崎龍雄 【庶務】文化財管理課 鈴木由喜 【確認調査・協議】事前審査係長 濱石哲也 担当 久住猛雄 【調査担当】荒牧宏行 【調査作業員】黒瀬千鶴 大庭智子 武田潤子 別府俊美 安高精一 二宮白人 小野千佳 酒井次憲 豊丸秀仁 永田八重子 渋谷留雄 濱フミ子 安高邦晴 知花繁代 坂本久幸 佐藤愛子 井上英子 尊田紹代 宗像正勝 遠山勲 芹川淳子 平田周二 山下淑子
【資料整理】濱石正子 松下伊都子 大石菜美子 相原聰子 樋口久美子 福島真理子 中山順子 庄島さよ子

II. 位置と環境

1. 地形

調査地点は博多遺跡群の最も南側の浜堤列に位置する。Fig.3の地形図で示すように浜堤列の南側斜面にあたり、調査で判明した地山の砂丘砂のレベルは北東側に若干高い。この基盤の砂丘砂の標高は3.3mである。

2. 既往の調査成果から

本調査で検出された古墳初頭、古墳後期～奈良時代を主に周辺の既往調査成果をもとに概観しておく。古墳初頭、特に布留併行期の竪穴住居跡は北東側の65次、59次、また地形的に高くなる50次や156次でも検出され、広く集落が展開していたことが判る。特に注意されるのは165次調査で土壙からこ

の時期の遺物とともに鍛冶関連の鏃の羽口、鍛造薄片、楕形滓が出土したことである。今回の調査でも時期は不確定ながら2点出土し、また、煤が付着した磁石も出土している。

奈良時代になると祇園町一帯は官衙域と考えられ、大型の掘建柱建物跡の検出や石帶等の出土がみられる。近接した65次でも柱穴が大きい掘建柱建物跡が検出され、本調査でも第III面で建物の復元までは至らなかったが比較的大きく、方形に近いプランの柱穴が検出された。

中世では65次調査の区画溝、中世墓が注目されるとともに上記の周辺調査地点も含め、中国産と考えられている花卉文の軒丸瓦、押圧文の軒平瓦が出土している。本調査でも溝、中世墓、中国産の瓦が出土し全体像を把握するための資料を提示することになった。

III. 遺構と遺物

1. 土層

調査は概ね3面の遺構検出面で行った。第I面は標高3.9mで暗青灰色土からなる。調査では12~13世紀代の遺構が多く検出された。第II面では標高3.7mの暗褐色砂層からなる検出面である。奈良時代、古墳時代の遺物が出土するようになる。古墳初頭の時期の竪穴住居跡もこの面から掘り込まれていると思われる。第III面は標高3.3m前後の明黄白色砂層（基盤層）である。古代の柱穴や古墳初頭の竪穴住居跡が明確となる。

2. 調査の概要

時代別に主な遺構を挙げると12~13世紀代の溝1条、井戸3基、中世墓2基、古代（奈良時代か）の柱穴、古墳初頭（布留式併行期）の竪穴住居跡3軒以上が検出された。出土遺物の中には12世紀代と考えられている中国産の瓦が出土したことや古墳初頭（布留式併行期）の遺物がまとまって出土したことなどが注目される。

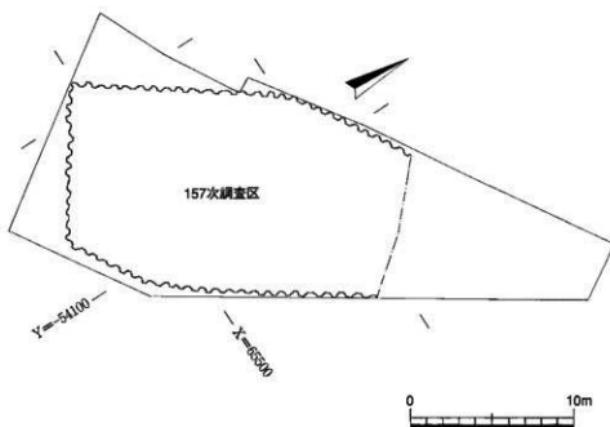


Fig.2 第157次調査範囲と位置図 (1/300)



Fig.3 博多遺跡群調査地点 (1/8,000)



Ph.1 第Ⅰ面調査区西側検出（北東から）



Ph.2 第Ⅱ面調査区東側全景（北東から）

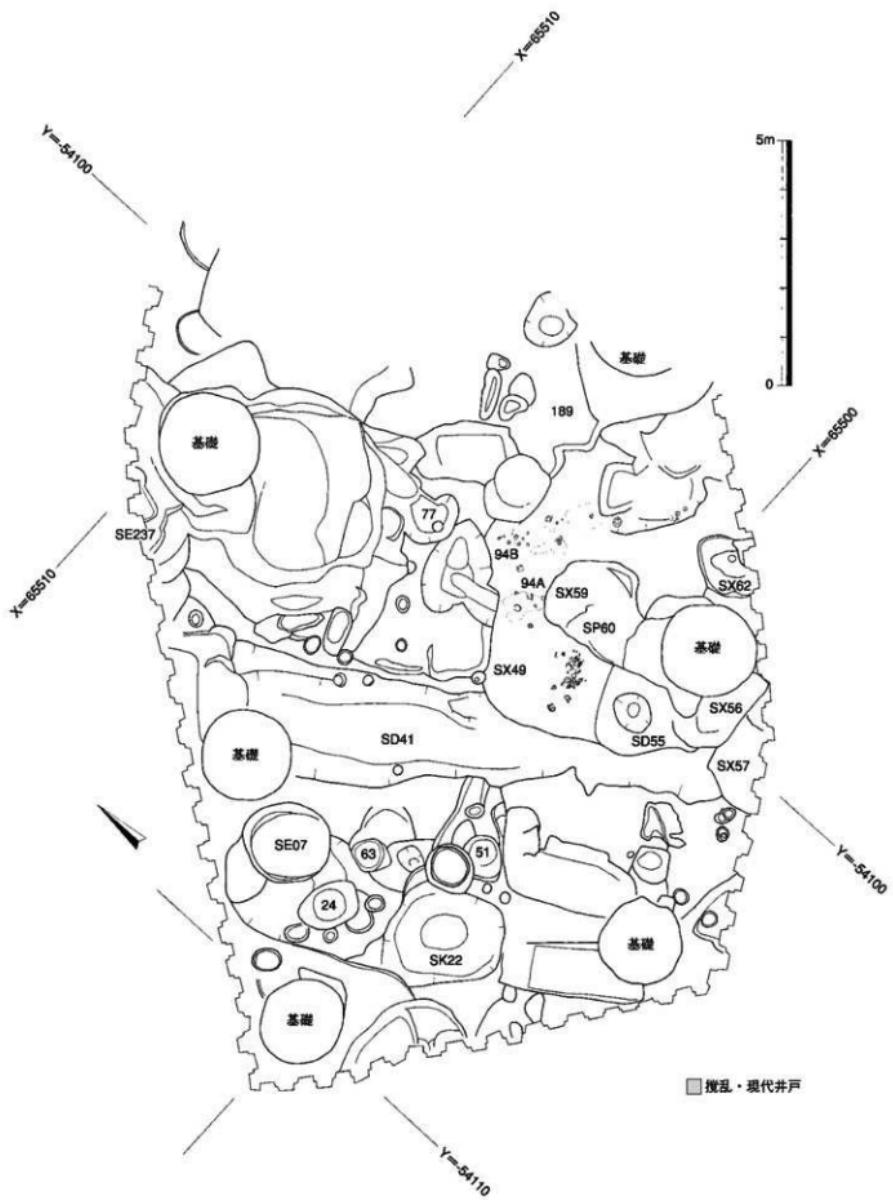


Fig.4 第I面遺構配置図 (1/100)



Ph.3 第Ⅱ面調査区東側全景（北東から）



Ph.4 第Ⅱ面東側全景（北東から）

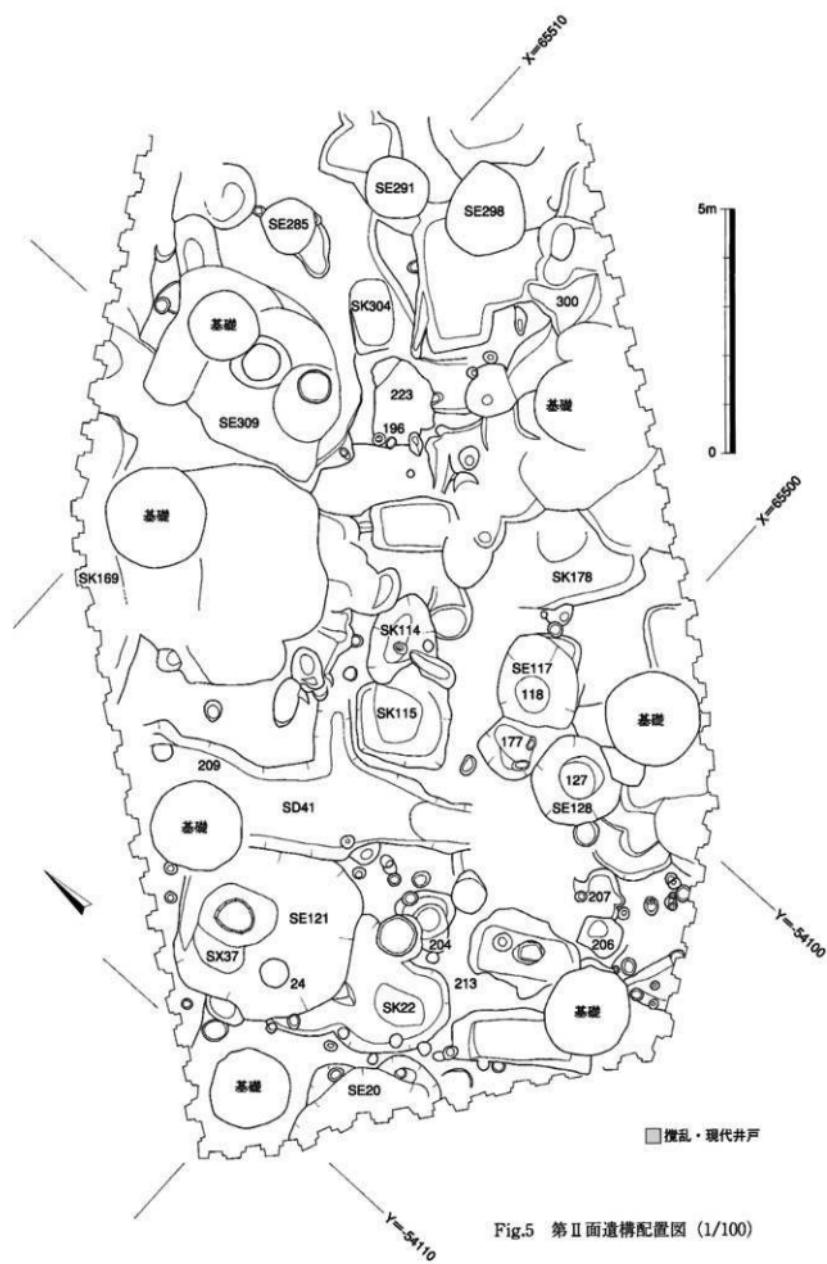


Fig.5 第II面遺構配置図 (1/100)



Ph.5 第Ⅲ面西側全景（北東から）

3. 第Ⅰ面、第Ⅱ面の調査

SD41

調査区の中央部をN-38°-Wで走行する。幅2.3m、深さ45cmを測る。上層は黒灰色粘質土が堆積するが下層は地山の明黄褐色砂が混じる土層となる。北半はプランを明瞭に識別できたが、南側は切り合って不明確であった。遺物はコンテナ(34×53×10cm)に2.5箱が出土した。1の土師皿は口径8.9cmを測るが、底径が6.1cmと小さく、糸切り底に2~5mm幅の板目が残る。9の青磁碗外底には「光口」の墨書きを有す。土師器や褐釉陶器の器形から13世紀代以降と考えられるが下限は不明確である。

SE24

調査区の北西部で検出された。第Ⅰ面で径60cmの井筒の痕跡が検出されていたが、掘方のプランは識別できなかった。第Ⅱ面において、1辺3.4m前後の正方形に近いプランが検出された。第Ⅰ面の検出面からの深さ170cm(標高2.0m)で桶の井筒が検出された。この掘方内には瓦で井筒を構築した現代井戸のSE07が含まれていた。従って、SE07出土遺物14~21の中にはSE24の掘方中のものを含む。

SE24の井筒下底から犬の骨格1軀が出土した。径68cmの桶からなる井筒一杯に丸く曲がっていた。未鑑定であるため詳細は別機会に報告する。

出土遺物

SE24からは1箱が出土した。14~21はSE07出土である。16の白磁皿は灯明皿として使用され、器

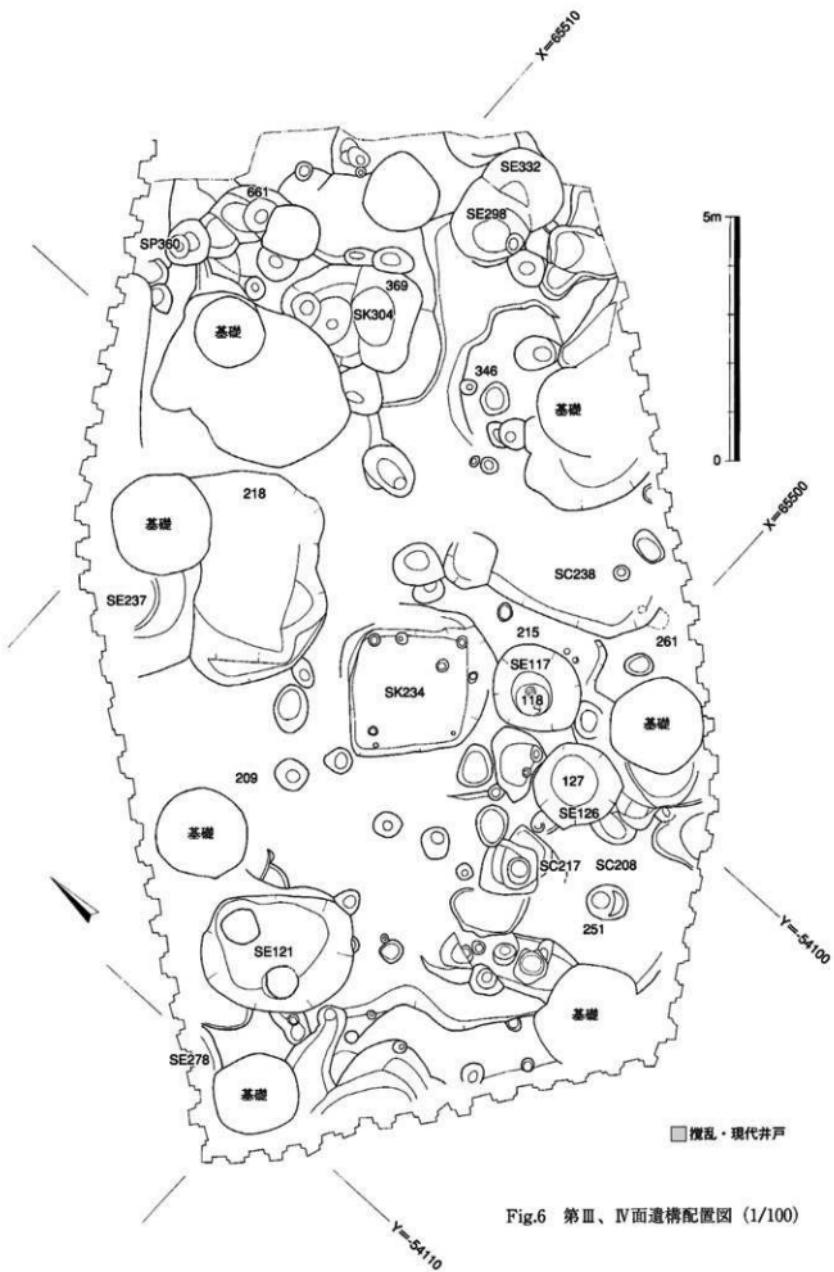


Fig.6 第III、IV面遺構配置図 (1/100)

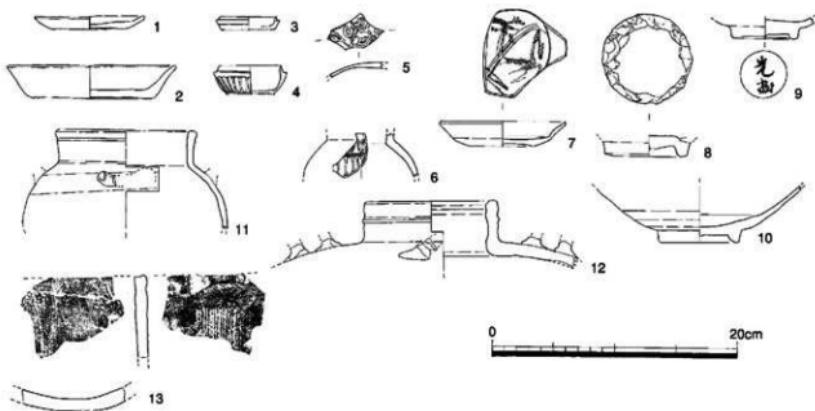
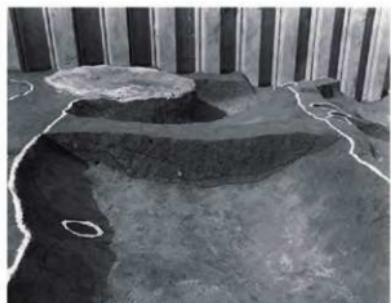


Fig.7 SD41 出土遺物実測図 (1/4)



Ph.6 SD41 土層断面 (南から)

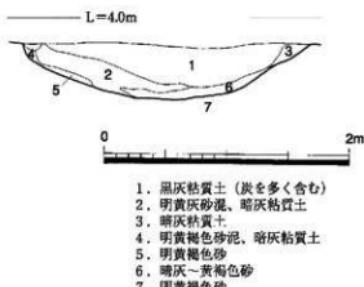


Fig.8 SD41 土層断面図 (1/40)

表が劣化し、口縁部に煤が付着している。22~28はSE24から出土し、12世紀後半以降と考えられる。51~53は掘方から出土し、53は塹である。

SE20

調査区西端で検出された。一部のみの検出で規模、井筒等は不明。29~31の出土遺物は11世紀後半~12世紀代の時期を示す。

SE126

調査区中央南側で検出された。第I面ではSD41を斜めに切ると識別されたSD55の一部に含まれる。第II面で径1.8mの円形の掘方が検出され、深さ170cm (標高2.3m) から径63cmの桶の井筒 (登録番号127) が検出された。出土遺物の32~43の下限は近世まで入ると思われる。36の陶器鉢は外底の釉を拭き取り、内底に黒色の煤 (炭) が付く。37の壺は外面肩部まで施釉される。



Ph.7 SE24 井筒内犬骨検出



Fig.9 SE24 井筒内犬骨平面図 (1/20)



Ph.8 SE24 下底集石検出（西から）



Ph.9 SE24 下底遺物出土状況（東から）

SE117

調査区中央南側でSE126に近接して構築されている。第Ⅰ面から検出されていたが、第Ⅱ面で長軸1.8m、短軸1.6mの梢円形プランの掘方を検出した。深さ270cm（標高1.0m）で径58cmの桶を用いた井筒を検出し、中から曲物2個体が出土した。44～46の出土遺物の下限の時期は13世紀以降と考えられる。

SE120

調査区の北西際で検出された。一部であるため、規模等不明である。出土遺物の土師器壺48の底部中央には径6mmの穿孔を有す。49の見込みには「河濱遺範」の印が、50の外底には「徳□」の墨書き



Ph.10 SE117 完掘（南から）



Ph.11 井筒118 曲物出土状況（東から）



Ph.12 SE126 完掘（南東から）

SE298出土である。

SK22

調査区西際近くで検出された。長軸長240cm、幅は150~210cmを測り北側が広い台形プランを呈す。深さ46cmを測り、中央にかけて低い。南側の壁際を主に土師器坏が流れ込むように出土した。

出土遺物の60~63の土師皿は口径7.4~8.1cmを測る。底部は厚く、内底の周縁が凹む。64~75の土師器坏は口径12.1~13.1cm内にまとまる。体部が湾曲し底部との境が内側にあるため、その境が不明瞭となるものが多い。粗雑で歪みがあるものが多い。76、77は大型の坏で各15.6cm、17.5cmの口径を測る。総じて出土遺物からみた時期は下限が13世紀後半代におけると思われる。

SK90 (115, 234)

調査区の中央で検出された。第I、II面で方形に近いプランを検出し、SK90、115と各遺構番号を付していたが、第III面で明確なプランを検出しSK234で登録した。第III面で検出したプランは軸長260cm前後の正方形に近い。第III面からの深さは約30cmである。第III面で検出した埋土は黒色砂を主としたもので、水平に近い人為的に埋められた可能性がある堆積である。84~95の遺物は第II面(SK115で登録)からの出土である。下限は12世紀前半代におさまると思われる。

を有す。

SE237

調査区中央北際で一部検出された。規模等は不明。出土遺物の54は越州窯系青磁皿である。外面体部に4分割の縦線をヘラで刻み、体部と底部の境にはヘラによる切り離し時の短い沈線が放射状に連続する。また、外底部には目跡が付着している。

SE278、SE298

SE278は調査区北西際で一部検出された。SE298は調査区東端近くで検出された現代の井戸である。出土遺物の56、57はSE278、58、59は

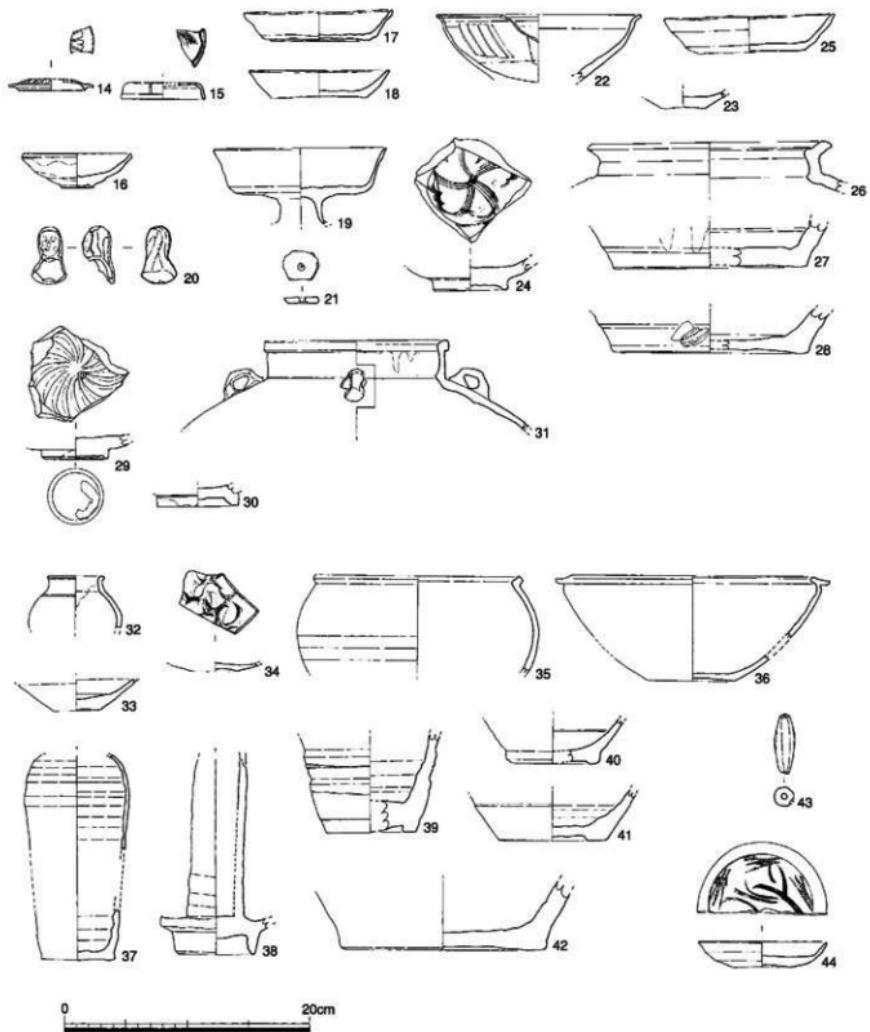


Fig.10 第I面井戸出土遺物実測図1 (1/4)

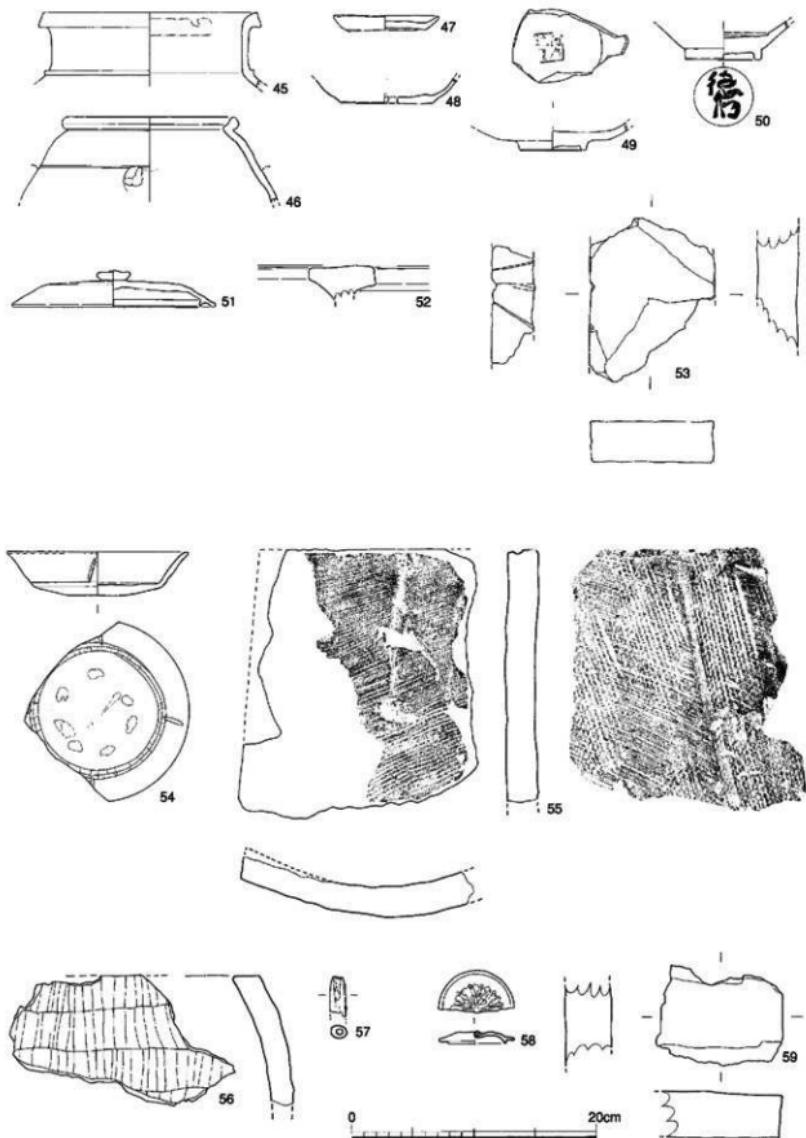
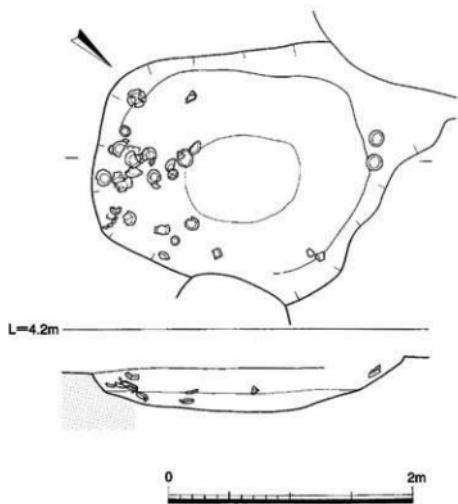


Fig.11 第I面井戸出土遺物実測図2 (1/4)



Ph.13 SX22 遺物出土状況

Fig.12 SK22 実測図 (1/40)

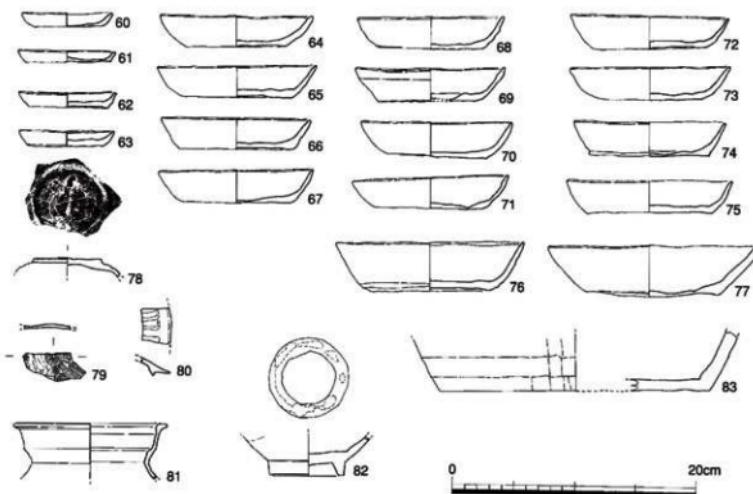


Fig.13 SK22 出土遺物実測図 (1/4)

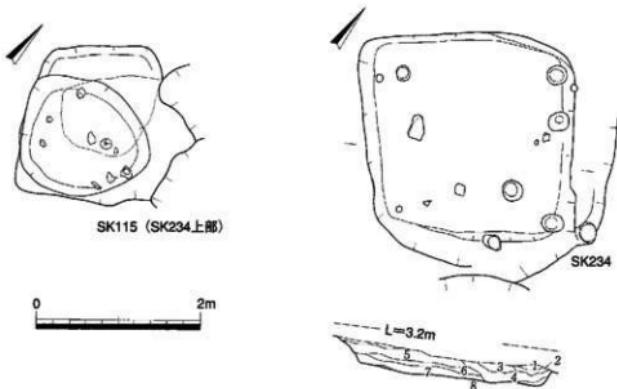


Fig.14 SK115、234実測図 (1/60)

- | | |
|-----------|------------|
| 1 黒色土(炭層) | 5 黒色土混暗褐色砂 |
| 2 明黄色砂 | 6 黒色土混暗褐色砂 |
| 3 暗褐色砂 | 7 黒色砂 |
| 4 黑褐色砂 | 8 明黄色砂 |



Ph.14 SK234 完掘 (北から)



Ph.15 SK234 下部完掘

SK304

調査区の中央東端近くで検出された。当初、黒灰粘質土からなる長軸長270cm、最大幅195cmの掘方を検出した。深さは150cmを測り、埋土中より牛骨が散乱した状態で出土した。外側の掘方は形状や深さから別の造構と判断され、SK304に切られていると考えられる。96、97の土師皿の口径は各7.8、8.0cmを測り、体部が外側へ大きく開く。出土遺物の時期は概ね13世紀後半を下限とする。

SX57

調査区中央南際で一部のみ検出され規模、性格等は不明である。出土遺物の103の龍泉窯系青磁束口の外面には弁先の丸い蓮弁に櫛齒文が入る。M1は銅製鋲金具である。透かしを交互に入れた花弁

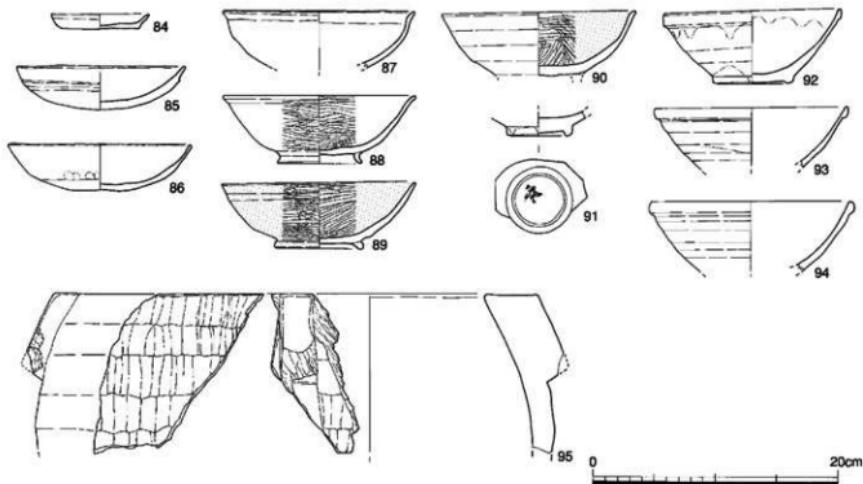


Fig.15 SK115 出土遺物実測図 (1/4)

の台座にリング通した立方体の接合部を取り付けている。接合部には十字の分割線を刻む。

SK169

第Ⅱ面の調査区中央北界で一部を検出した。遺物が集中して出土したが、規模、性格等不明である。掲載した119~120が出土し、時期はおよそ13世紀前半位までに下限をおくことができる。114の白磁皿は径3.5cmの小さく突出した底部以外は施釉されている。116の墨書は判読できない。

SK177

第Ⅱ面の調査区中央南寄りで検出された。SE117、127から切られているが、1辺120cmの方形プランに近い土壙である。深さは70cmを測るが、この上面の第Ⅰ面から土師器の坏皿が集中したSX40を検出した。出土遺物の121~124の土師器坏は口径12.0~12.5cm、器高2.4~2.7cmにまとまる。

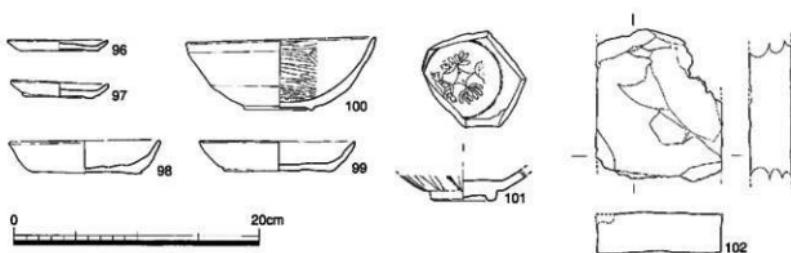
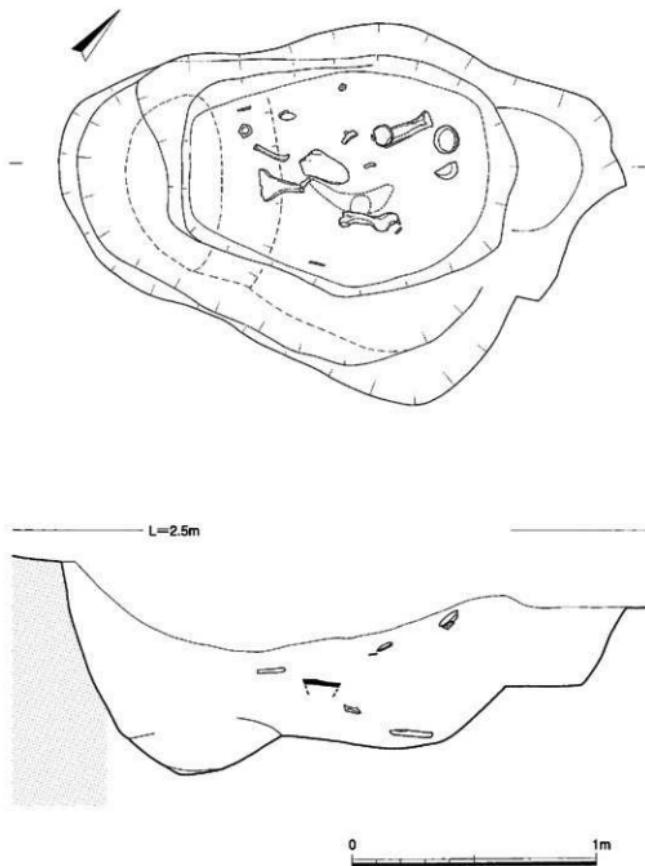
時期は13世紀代におさまるものと思われる。

SK178

調査区中央南側で検出された。方形に近いプランが検出されたが、全体は判別できなかった。北側の不明瞭となった位置には第Ⅰ面で土師器坏皿が集中したSX94を検出していた。出土遺物の126~127の土師器坏は上記のSK177に近い時期と考えられる。

SX40

第Ⅰ面の中央南寄りで検出された。土師器の坏、皿が点々と集中して分布していた。東側にかけて集中した地点を94A、94Bとして遺構番号を登録した。掲載した129~136が出土したが、土師皿の口径は7.7cm前後で、土師器坏は12.2cm前後にまとまり、体部と底部の境に強いヨコナデを加え、波状となっているものが多い。時期は13世紀後半代におさまると思われる。





Ph.16 SK304 炭、土師器、骨出土状況(西から)



Ph.17 SK304 牛骨出土状況



Ph.18 SK304 牛骨出土状況近接

SX94

上記のようにSX40の東側に土師器が集中した地点である。137、139の土師器壺は口径が12.7cm前後を測り SX40出土のものより大きく古相を示すが、近い時期であろう。140の瓦質の火舍は時期的にかけ離れていると考えられ、混入したものか。

その他の出土遺物

105、106がSK51出土の土師器壺、107がSX23出土の土鉢、108がSX32出土の土錘である。S1はSP(柱穴)出土の砂岩製磨石で、片面が平坦面となり、側面も周縁に沿って磨られている。109~112はSF(柱穴)45出土の遺物である。112は下層の古墳初頭の時期の混入である。113はSD47出土の土師皿である。土師器壺についてはおよそ13世紀代におさまるものと思われる。

141はSK134出土の白磁椀である。外面に焼成時の粘土が付着している。142は有軸の斜格子の中に部分的に「十」が入るタタキ文である。143~145の土師器はSK300出土の完形である。143の土師皿は口径8.0cmを測り、底部が厚く、短い体部が鋭角に立ち上がる。14世紀代と思われる。146のSD303出土の土師壺も底径が小さく、14世紀代に入ると思われる。147は調査区北東部のSE309の掘方内から出土した青磁壺である。口縁下にヘラによる連続した小さな刻みを入れる。148は第Ⅱ面の検出時に出土した青白磁の合子である。149も第Ⅱ面の検出時に出土した東播系捏鉢である。

150は北東際で一部を検出したSX315から出土した、黄釉に鉄絵を描いた盤である。151は北東部の検出面から出土した陶器壺であるが、近世以降と思われる。152~156は調査区東よ



Ph.19 SK51 遺物出土状況（西から）



Ph.20 SK51 遺物出土状況（焼土、炭検出 北西から）



Ph.21 SK177 完掘（西から）

りの遺構から出土した。152の須恵器壺蓋は下層の混入である。153は白磁大楕は高台とその近くの体部が露胎である。154は青白磁の合子は148と近似する。156の丸瓦は凸面に繩目、凹面に布目が残る。

第Ⅱ面～第Ⅲ面出土遺物

第Ⅱ面では8世紀代以前の遺構、遺物も検出されるが、中世の遺構が大半を占め、区別が困難である。古代の遺構とみられたのは第Ⅲ面の西側で検出した方形プランの柱穴のみである。

157～161は調査区中央の北側でSD41周辺を掘り下げていく途中で出土した。土層は褐色砂層に入り、古墳から奈良時代の須恵器を含む。160の壺身は黄色を呈した土師器の焼成である。最も新相を示す159の壺蓋は8世紀後半代と考えられる。161の須恵器壺は口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形である。胴部には横位の平行タキを施し、灰釉（黄色）が斜め下方から掛かる。164～165は第Ⅱ面の掘り下げで第Ⅲ面で古代の方形プランの柱穴が検出された周辺から出土した。7～8世紀代とみられる。166は完形である。169、170は調査区中央の（南際の第Ⅱ面掘り下げから、171～173は第Ⅱ面の遺構SX217から出土した。174～176も調査区東半部の掘り下げで出土した。175は脚部の裾に2箇所、176は底部中心に径5mmの穿孔を有す。177～180は調査区中央の南端のトラシマがみられる褐色砂中から出土した。178は第Ⅲ面で検出された布留併行期の土師器高壺であろう。179、180は鍛冶を示すが、時期は不明。

S2～S12の滑石製白玉は調査区東よりまとまって出土した。周辺に亞

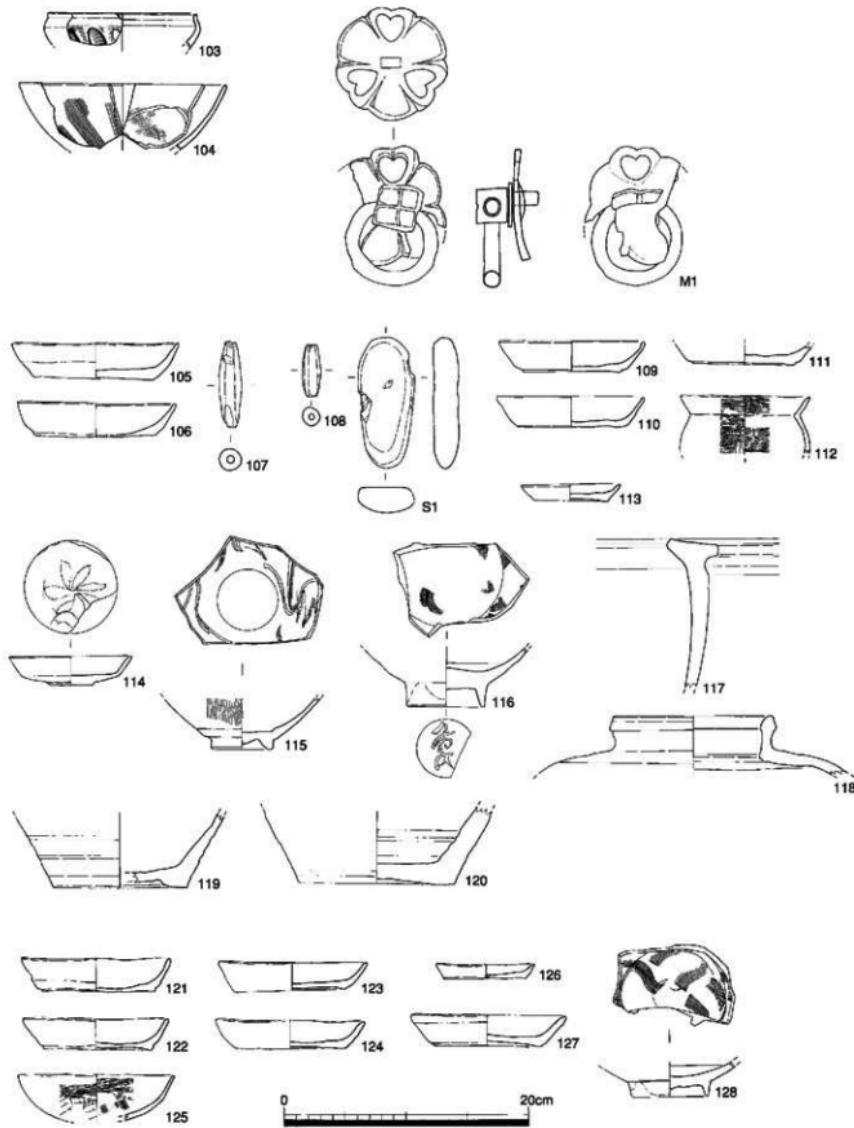


Fig.18 第I面土壤出土遺物実測図 (1/4)



Ph.22 土器集中94（南から）



Ph.23 土器集中40（西から）

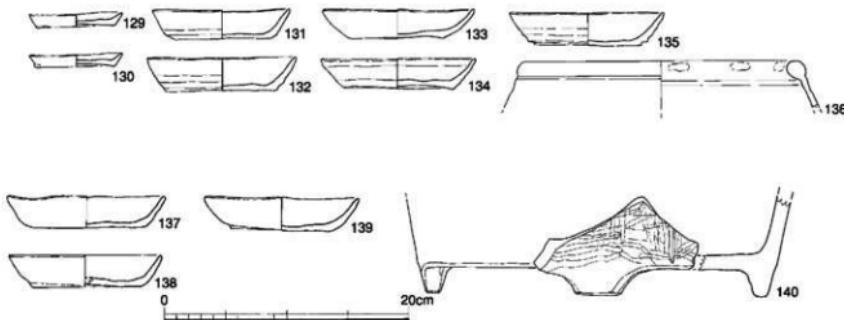


Fig.19 土器集中40、58、94出土遺物実測図 (1/4)

な方形に近い落ち込みが検出されているので、竪穴住居跡内に含まれている可能性が高い。181、182は調査区東側のSP360から出土した。第Ⅱ面から第Ⅲ面のレベルの遺構である。183、S13は調査区東側の遺構から出土した。この地点も方形に近いプランが検出され、竪穴住居に含まれていると思われる。木目直行のタタキが施され、内面は粗いハケメが縱横にみられる。硬質な焼成で黄褐色を呈し火熱により一部、赤変している。S13は泥岩質の砥石である。S14は181、182を含むSP360に切られたSX366から出土した安山岩の磨石である。

SX223

調査区の東側で検出された。主軸方位をS-64°-Wに向け頭部を西側に置く。人骨は脆弱で慎重に細かい作業を続けた。仰臥葬の状態で、身長156cm程度とみられる。人骨については鑑定依頼し p-37に掲載しているので参照されたい。掘方は識別が難しく不明瞭であったが、120×170cmの広い、下底が緩やかな舟底状の落ち込みが検出された。木棺、釘等は出土していない。頭骨の北側は柱穴が切り込み、南側の頭部より数cm高いレベルからは魚骨を含む骨が出土した。未鑑定のため詳細の報告は改めて行いたい。

SX157

調査区の南西部で第Ⅱ面を掘り下げ中に人骨頭部のみを検出した。切り合いが著しく掘方等不明である。頭骨は脆弱で取り上げ中に破損させ形状を保持できなかった。おそらく、SX223同様の中世の埋葬であろう。



Ph.24 SK223 人骨検出状況（東から）



Ph.25 SK223 頭骨周辺（北東から）



Ph.26 SK223 人骨検出状況（頭部検出）

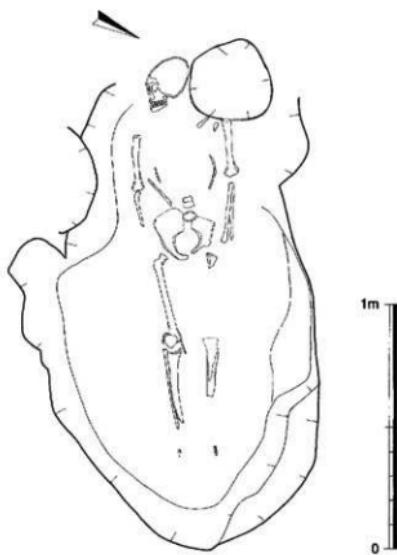


Fig.20 SX223 人骨実測図（1/20）

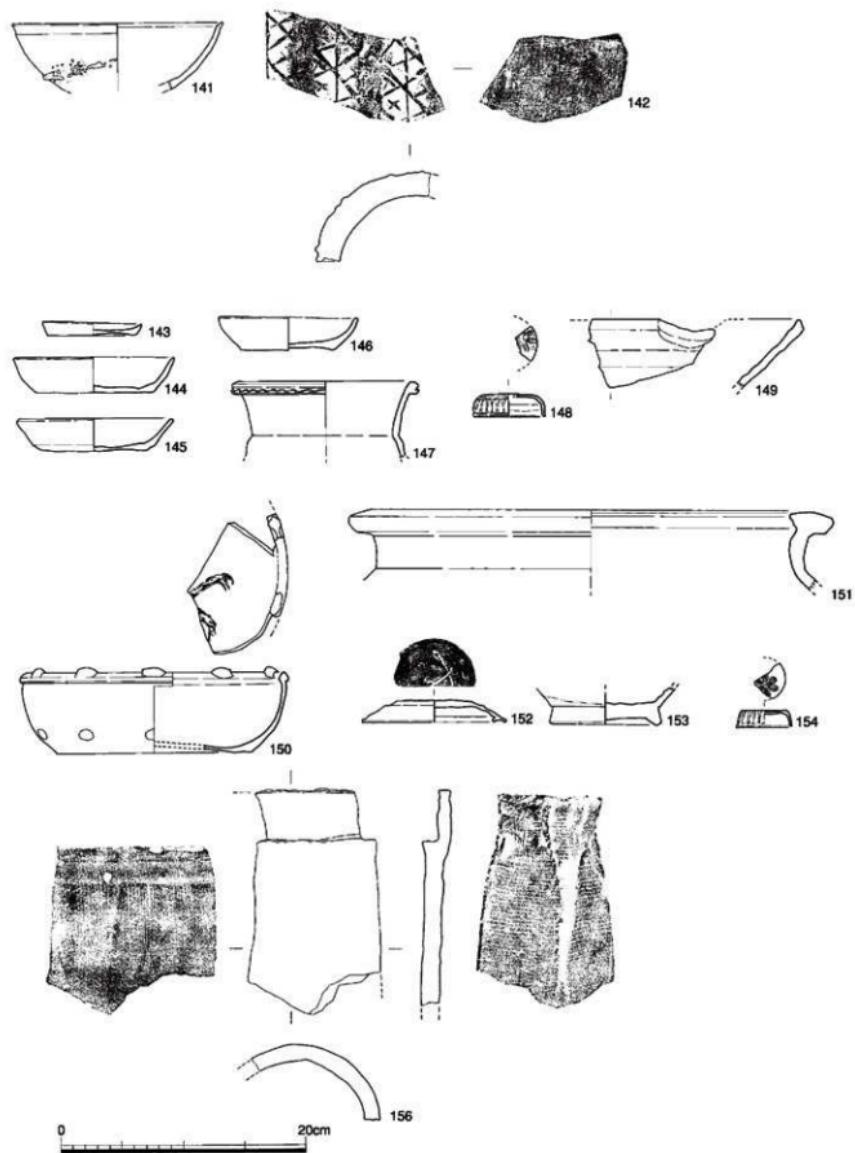


Fig.21 第I、II面遺構出土遺物実測図1 (1/4)

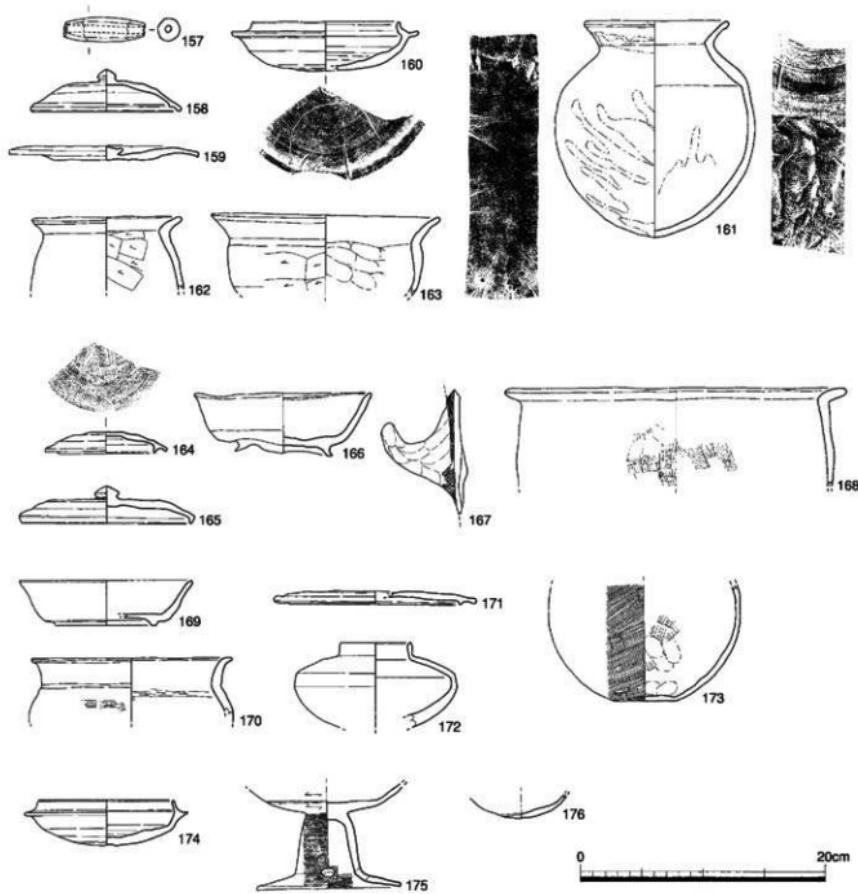


Fig.22 第I、II面遺構出土遺物実測図 2 (1/4)

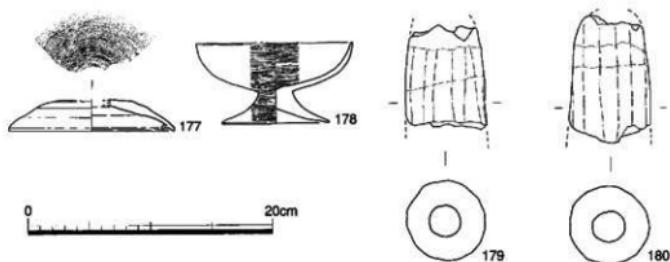


Fig.23 第I、II面遣構出土遺物実測図3 (1/4)

第III面の遣構

SC208

調査区の南西部で検出された。平面プランは南側の調査区際で壁が検出された他は不明である。

周辺から焼土が1箇所検出されたが、床面とレベルが異なり疑問である。検出された壁近くから砥石を含む土器片がまとまって出土した。

出土遺物 (184~197、S15~S16)

184、185はほぼ完形の鉢である。184の内外面はミガキを施し、内面と外面体部上位は回転を用いた横位のミガキを施す。185の内面は放射状に細い縦位のミガキを施す。186は波状口縁をつくり、内面は185同様に縦位のミガキを等間隔に施す。187の坏部は完形である。精製土器で内外面に細かい横位のミガキが施され、内面にはヨコナデ若しくは横位のミガキ後に底部を中心に密な放射状のミガキを施す。189の小形甕も完形に近い。190は赤褐色を呈した精製土器である。底部に穿孔を有す。

191の内面は横位のミガキ後に放射状に縦位のミガキを施す。192、193も精製土器である。192の裾部との境には3箇所穿孔を有す。193は内面と外面の裾部に放射状の細い暗文を施す。194~197は布留期中頃の甕の特徴をもつ。S15は泥岩製砥石、S16は砂岩製砥石で底面の1面に煤状のものが付着している。

SX217

灰色粘土を用いた据え付けのカマドである。171、172の須恵器が出土し、7世紀後半以降の時期が考えられる。

SX206、207

調査区南東部の第II面で検出した遺構であるが、下面で検出したSC208と重なり、出土遺物は混入したものが多いと思われる。198の体部下位はケズリ状のミガキ、上位と内面体部はヨコナデを施す。199の外面体部は斜位のケズリ、内外面の体部上位はヨコナデを施す。200高坏の外表面には横位のミガキ、201坏部の内底部には放射状のミガキを施す。202の裾の屈曲部には3箇所穿孔を有す。

203の小形甕の外面体部上位は横位のハケメ、内面頸部の屈曲部以下はヘラケズリを施す。204の内面頸部より約3cm下まではナデ押さえがみられる。205は歪であるが小さな丸底を有す。206の内面頸部以下約5cmまではヨコナデが施される。時期はSC208とほぼ同時期の布留期中頃であろう。

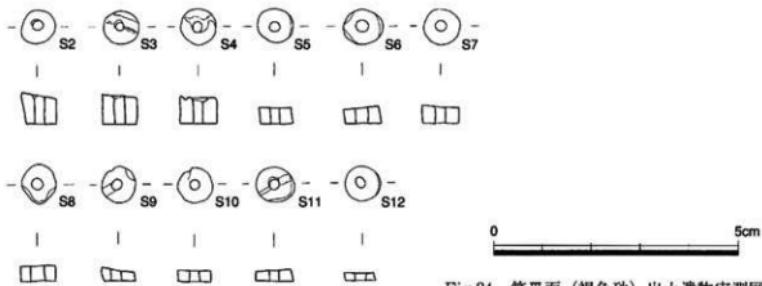


Fig.24 第Ⅲ面（褐色砂）出土遺物実測図（1/1）

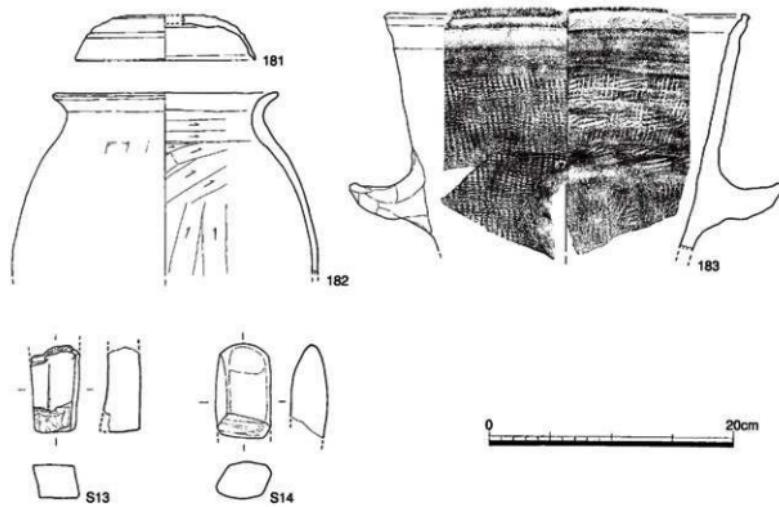


Fig.25 第Ⅲ面遺構出土遺物実測図（1/4）

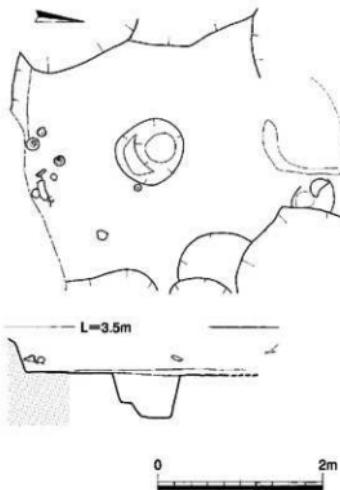


Fig.26 SC208 実測図 (1/60)

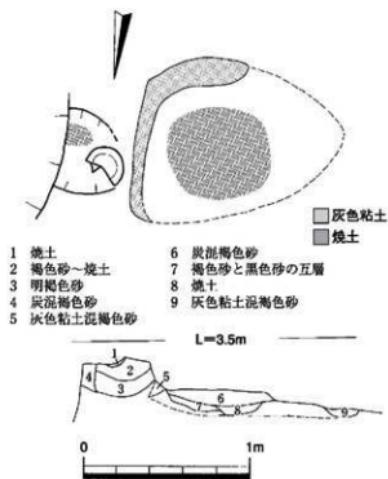


Fig.27 SX217 (炉跡) 実測図 (1/30)



Ph.27 SC208 遺物出土状況



Ph.28 SX217 (炉跡) 検出

SX246

調査区中央の南寄りで検出された。大半がSE117に切られている。約30cmの深さで竪穴住居跡の可能性が高い。207、208は完形である。207は外側と内面口縁部は横位の細かいミガキ、208の外底部から体部下位にかけては縱位のミガキ、内面口縁部にはヨコナデ若しくは細かいミガキが施されている。209は外側と内側の頸部以下約4cmまではヨコナデを施す。S17は泥岩状の均質な堆積岩である。S17は隣接するSX245から出土した磨石である。安山岩か。S19は砂岩製の砥石で火熱を受け赤変している。

鉄器

M3～M6は第II～III面の褐色砂層中から出土し古墳後期（6世紀後半）～奈良時代（8世紀後半）もしくは古墳初頭（布留併行期）までの時期に含まれる可能性が高い。

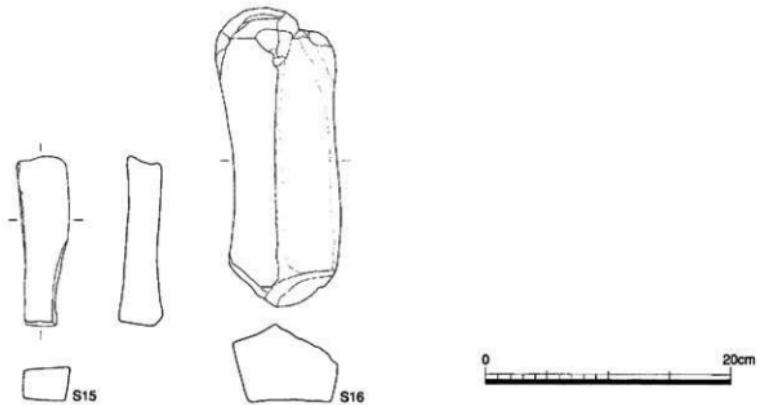
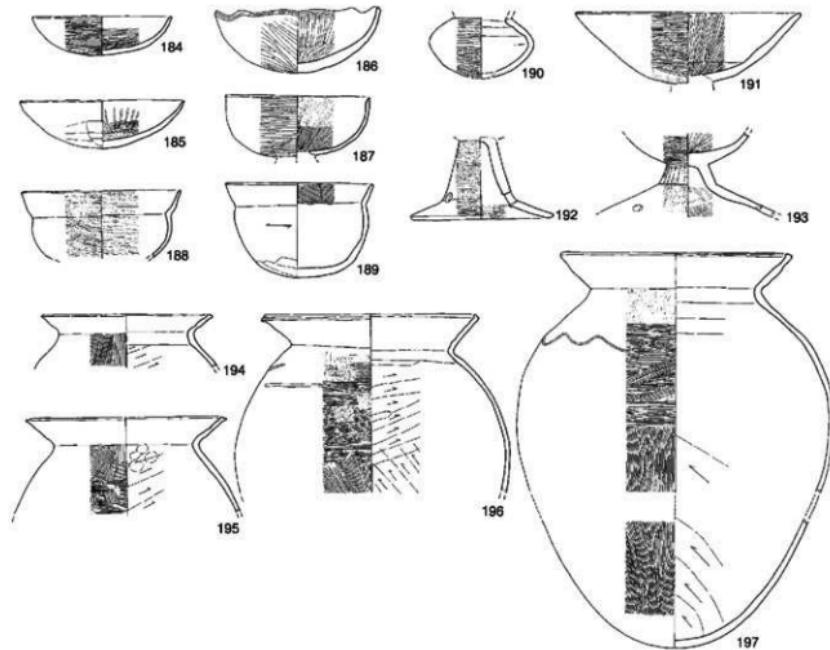


Fig.28 SC208 出土遺物実測図 (1/4)

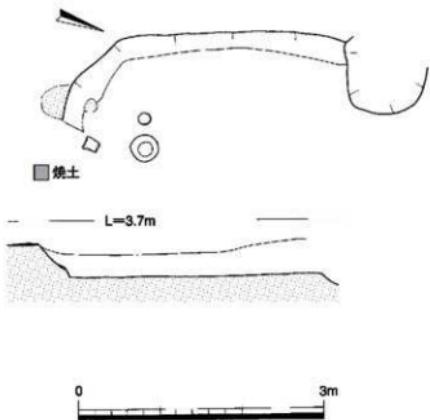


Fig.29 SC238 実測図 (1/60)



Ph.29 SC238 検出状況



Ph.30 SX246 遺物出土状況

M2は調査区東側の第I面を掘り下げた下部の褐色砂層中から出土した鏃である。中世墓の副葬品の可能性がある。M3は鑿を想起させるが鏃が著しく尖端の形状は不明瞭である。袋部は完全に閉じた状態である。M4、M5は鉄鎌である。M6は一方が薄くなり、鎌身部もしくは鑿の可能性がある。

銅鏡

出土した中世の銅鏡はM7（元祐通寶・行書・初鑄1086年）のみである。

その他の遺物

210～216は第I面の遺構から出土した遺物である。210の頭部は赤色に近い顔料が残る。S19は砂岩製の石弾、211は青白磁の合子、212は花文のスタンプを押した褐釉陶器、213は土錘、214は黒色土器A類の壊である。215は花卉文の軒丸瓦、216は指押さえが著しい押圧文軒平瓦でいずれも中国産と考えられている。

表探・攢乱出土遺物

217、218は龍泉窯系青磁碗、219も龍泉窯系青磁碗で見込みに「金玉滿堂」のスタンプを有す。220は褐釉陶器の耳壺、221は古墳初頭の高壺、S20は石鍋片の再加工によるスタンプである。223は粘土に花弁を型押している。223は内黒土器を円盤状に打ち欠き、穿孔している。

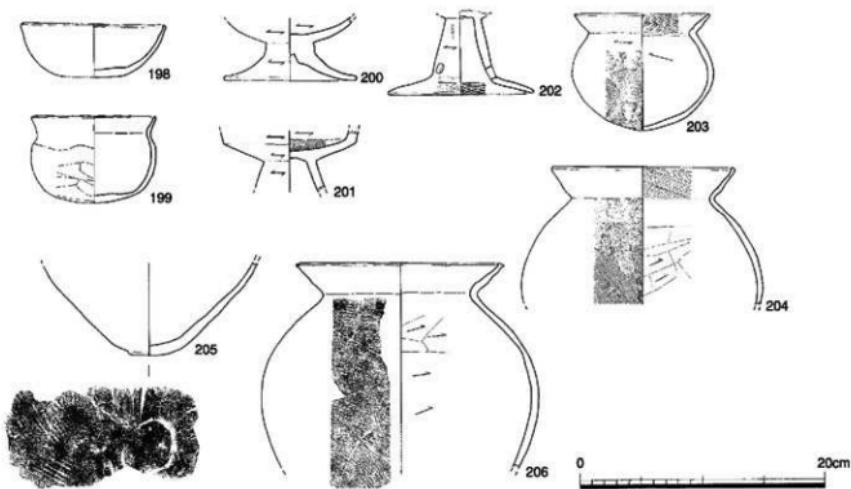


Fig.30 SX206, 207 (SC208周辺) 出土遺物実測図 (1/4)

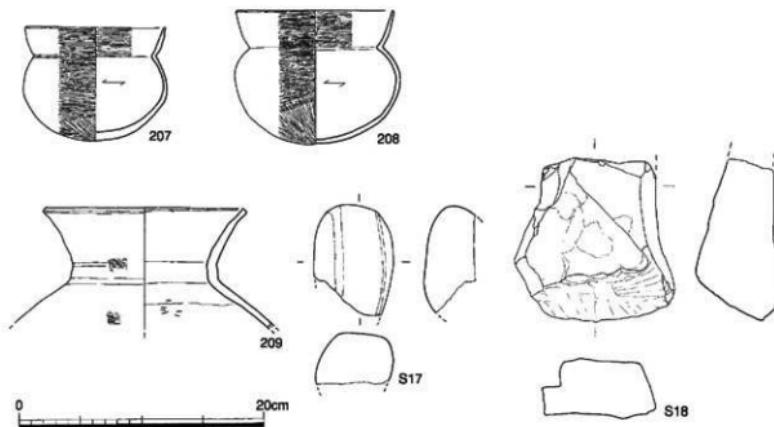


Fig.31 SX246 出土遺物実測図 (1/4)

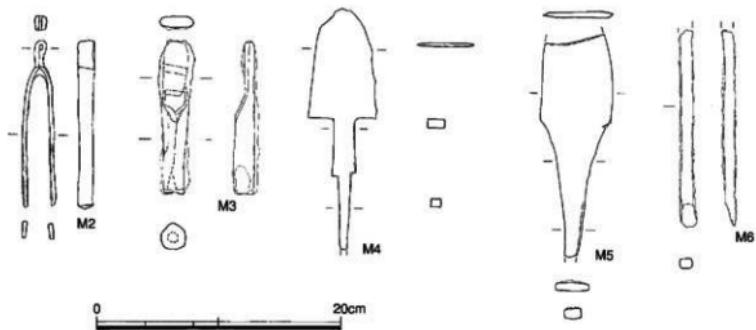


Fig.32 出土鉄器実測図 (1/4)

IV. おわりに

II-2に概述した部分と重なるが、検出した遺構について若干補足しておきたい。

(検出された遺構の時期)

今回はⅢ面の調査で行ったが、基本的には第Ⅰ面では中世特に12~13世紀代が主体を占め、第Ⅱ面の褐色砂層では古墳初頭、古墳後期~奈良時代の遺構・遺物が出土し、第Ⅲ面が黄白色砂層（基盤層）となる層序である。第Ⅱ面に部分的に黒色土（整地層か）がみられたが、このような層序は概ね周辺調査と同じである。また、検出された遺構の時期もII-2(P-1)で概述したとおり、周辺の調査成果と同様である。

Tab.1 (P-34) は本調査で出土した土師皿と壺の中で比較的大きい破片(1/3以上)の法量をまとめたものである。土師皿は底部に糸切りの痕跡を有した口径7.5~8.7cmのものが大半を占める。壺についても口径11.2~14.0cm、器高2.2~3.0cmにはばまとまる。概ね時期的には12世紀後半~13世紀代に比定できると思われる。今回の調査で検出されなかった15~16世紀代の中世末については層序の検討も含め、土地利用については今後の調査成果を待ちたい。

なお、本調査で検出されたSD41と65次調査で検出された区画溝との関連については、現段階では明らかではない。また、周辺でも検出されている中世墓の分布についても今後の集積を待ちたい。

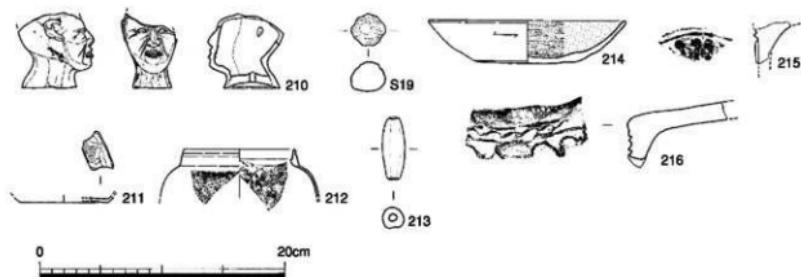


Fig.33 第I面柱穴出土遺物実測図 (1/4)

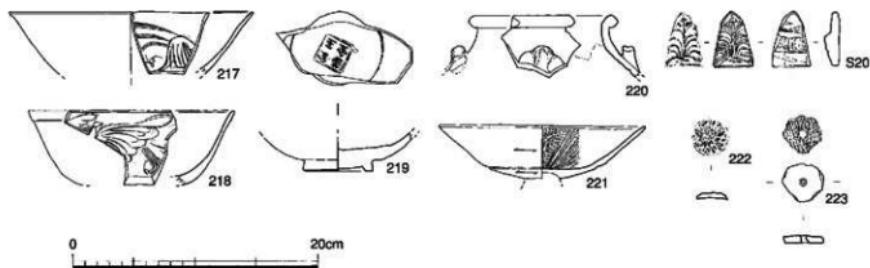
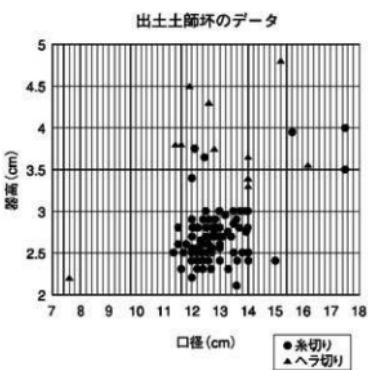
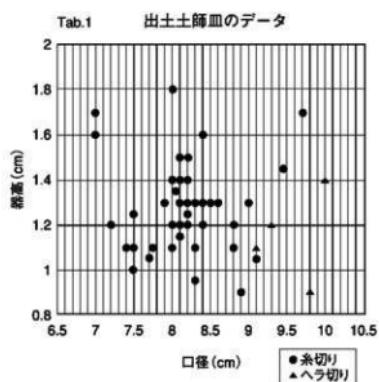


Fig.34 表探、擾乱出土遺物実測図 (1/4)



番号	出土地点	種類 1
1	SD41	土師皿
2	SD41	土師坏
3	SD41、SX49	白磁合子
4	SD41	青白磁合子
5	SD41	青白磁
6	SD41	青白磁小壺
7	SD41	同安窯系青磁皿
8	SD41	青磁碗転用
9	SD41、SX49	青磁碗
10	SD41	青磁碗
11	SD41	褐釉陶器
12	SD41	褐釉陶器
13	SD41	平瓦
14	SE07	青白磁合子蓋
15	SE07、井筒	青白磁合子
16	SE07	白磁皿（灯明皿）
17	SE07、井筒	土師坏
18	SE07、井筒	土師坏
19	SE07、井筒	須恵器高坏
20	SE07	素燒人形
21	SE07、井筒	有孔円盤（土師皿）
22	SE24、井筒	同安窯系青磁碗
23	SE24	白磁皿
24	SE24	龍泉窯系青磁碗
25	SE24	土師坏
26	SE24、井筒	褐釉陶器
27	SE24、井筒	褐釉陶器
28	SE24、井筒	褐釉陶器
29	SE20	龍泉窯系青磁碗
30	SE20	白磁碗（丹籠加工）
31	SE20内攪乱	陶器耳唇
32	SE126（井筒）	陶器小壺
33	SE126（井筒）	白磁皿
34	SE126（井筒）	白磁皿
35	SE126（井筒）	青磁壺
36	SE126（井筒）	陶器体
37	SE126（井筒）	陶器壺
38	SE126（井筒）	陶器
39	SE126（井筒）	陶器壺
40	SE126（井筒）	白磁碗
41	SE126（井筒）	陶器
42	SE126（井筒）	陶器壺
43	SE126（井筒）	土鍤
44	SE117	同安窯系青磁皿
45	SE117（井筒）	白磁壺
46	SE117（井筒）	褐釉陶器、耳壺
47	SE120	土師皿
48	SE120	土師坏（有孔）
49	SE120	青磁碗
50	SE120	青磁碗
51	SE121	須恵器坏蓋
52	SE121	弦生菱口縁部
53	SE121	壺
54	SE237	越州窯系青磁皿
55	SE237	平瓦
56	SE278	石鈎
57	SE278	土鍤
58	SE298	青白磁合子蓋
59	SE298	壺
60	SK22	土師皿
61	SK22	土師皿
62	SK22	土師皿
63	SK22	土師皿

番号	出土地点	種類 1
64	SK22	土師坏
65	SK22	土師坏
66	SK22	土師坏
67	SK22	土師坏
68	SK22	土師坏
69	SK22	土師坏
70	SK22	土師坏
71	SK22	土師坏
72	SK22	土師坏
73	SK22	土師坏
74	SK22	土師坏
75	SK22	土師坏
76	SK22	土師坏
77	SK22	土師坏
78	SK22	須恵器坏蓋
79	SK22	青白磁
80	SK22	青白磁合子蓋
81	SK22	褐釉陶器壺
82	SK22	白磁碗
83	SK22	滑石製石鈎
84	SK115	土師皿
85	SK115	瓦質坏
86	SK115	土師坏
87	SK115	土師坏
88	SK115	土師坏
89	SK115	黑色土器B
90	SK115	黑色土器A
91	SK115	白磁碗
92	SK115	白磁碗
93	SK115	白磁碗
94	SK115	白磁碗
95	SK115	石鈎
96	SK304	土師皿
97	SK304	土師皿
98	SK304	土師坏
99	SK304	土師坏
100	SK304	瓦器
101	SK304	龍泉窯系青磁碗
102	SK304	壺
103	SX57	龍泉窯系青磁束口
104	SX57	同安窯系青磁碗
105	SK51	土師坏
106	SK51	土師坏
107	SX23	土鍤
108	SX32	土鍤
109	SP45	土師坏
110	SP45	土師坏
111	SP45	土師坏
112	SP45	土師器壺
113	SD47	土師皿
114	SK169	白磁皿
115	SK169	同安窯系青磁碗
116	SK169	白磁碗
117	SK169	褐釉陶器壺
118	SK169	褐釉陶器壺
119	SK169	褐釉陶器
120	SK169	褐釉陶器
121	SK177	土師坏
122	SK177	土師坏
123	SK177	土師坏
124	SK177	土師坏
125	SK177	土師坏
126	SK178	土師皿

番号	出土地点	種類 1
127	SK178	土師壺
128	SK178	白磁碗
129	SX40	土師皿
130	SX40	土師皿
131	SX40	土師壺
132	SX40	土師壺
133	SX40	土師壺
134	SX40	土師壺
135	SX40	土師壺
136	SX40	褐釉陶器壺
137	SX94A	土師壺
138	SX94A	土師壺
139	SX94	土師壺
140	SX58A	瓦質土器
141	SK134	白磁碗
142	SK134	丸瓦
143	SX300	土師皿
144	SX300	土師器壺
145	SX300	土師器壺
146	SD303	土師器壺
147	SE309	青磁壺
148	312 (検出)	青白磁合子
149	313 (検出)	須恵器捏鉢
150	SX315 - 321	黄褐色陶器盤
151	SD313	陶器壺
152	SX317	須恵器壺蓋
153	SX317	白磁碗
154	SP318	青白磁合子
156	SP318	丸瓦
157	209包含層	土錐
158	209包含層	須恵器環身
159	209包含層	須恵器環蓋
160	209包含層	須恵器環身
161	209包含層	須恵器蓋
162	209包含層	土師器壺
163	209包含層	土師器壺
164	213包含層	須恵器環蓋
165	213包含層	須恵器環蓋
166	213包含層	須恵器環身
167	213包含層	土師器壺取手
168	213包含層	土師器壺
169	SX216周辺	須恵器環蓋
170	SX216周辺	土師器壺
171	SX217	須恵器環蓋
172	SX217	須恵器壺
173	SX217	土師器壺
174	検出面	須恵器環身
175	220検出面	土師器高环
176	SX218	土師器壺底部
177	215包含層	須恵器環蓋
178	215包含層	土師器高环
179	215包含層	鞆の羽口
180	215包含層	鞆の羽口
181	S P360	須恵器環蓋
182	S P360	土師器壺
183	SX368、369	土師器壺
184	SC208	土師器鉢
185	SC208	土師器鉢
186	SC208	土師器鉢
187	SC208	土師器高环
188	SC208	土師器鉢
189	SC208	土師器鉢 (壺)
190	SC208	土師器壺

番号	出土地点	種類 1
191	SC208	土師器高环
192	SC208	土師器高环
193	SC208	土師器高环
194	SC208	土師器壺
195	SC208	土師器壺
196	SC208	土師器壺
197	SC208	土師器壺
198	SX206、207	土師器鉢
199	SX206、207	土師器鉢 (壺)
200	SX206、207	土師器高环
201	SX206、207	土師器高环
202	SX206、207	土師器高环
203	SX206、207	土師器壺
204	SX206、207	土師器壺
205	SX206、207	土師器壺
206	SX206、207	土師器壺
207	SX246	土師器壺
208	SX246	土師器壺
209	SX246	土師器壺
210	SX52	人形
211	SP60	青白磁合子
212	SX69	陶器壺
213	SX69	土錐
214	SX62	黒色土器A類
215	SX111	軒丸瓦
216	SX69	軒平瓦
217	表採	龍泉窯系青磁碗
218	表採	龍泉窯系青磁碗
219	搅乱	龍泉窯系青磁碗
220	搅乱	褐釉陶器耳壺
221	不明	土師器高环
222	表採	土製品
223	搅乱	有孔土製品
S1	SP39	磨石
S2	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S3	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S4	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S5	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S6	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S7	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S8	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S9	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S10	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S11	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S12	346 (褐色砂)	滑石製臼玉
S13	368周辺	泥岩製砥石
S14	SX366	磨石
S15	SC208	砥石
S16	SC208	砥石
S17	245 (褐色砂)	磨石
S18	245 (褐色砂)	砥石
S19	SX56	石彈
S20	土器集中	滑石製スタンプ
M1	SX57	銅製飾り金具
M2	189 (褐色砂)	鑷
M3	209 (褐色砂)	鉈?
M4	330 (褐色砂)	鉄鏃
M5	350 (褐色砂)	鉄鏃
M6	209 (褐色砂)	鉄鏃?

福岡市博多遺跡群第157次調査出土の中世人骨

中橋孝博（九州大学大学院 比較社会文化研究院）

はじめに

古い歴史をもつ港町・博多では、長年にわたって旧市街区の調査が続けられ、出土した膨大な遺物、遺構の中には、弥生～近世にいたる数多くの人骨資料も含まれている。博多のような都市環境が人の骨形質にどのような影響を与えるのか、同時代の多くの非都市部の住人とどのような違いを見せるのかを明らかにすることは、人骨形態の解釈に当たって有用な基礎情報となろう。2006年の初めに福岡市教育委員会によって第157次調査が実施され、中世初期の人骨が出土した。保存状態が悪く、得られた知見は限られたものになったが、ここにその分析結果を示す。

遺跡・資料・方法

第157次調査は、博多遺跡群の南端近く、福岡市博多区祇園町に位置する。古墳時代以降の遺構が確認されたが、中世では12～13世紀に属する溝や竪穴などが検出され、一基の木棺墓も出土した。人骨はこの木棺墓（SX223）から出土したもので、そのほかに、埋葬施設は確認されなかつたが、別個体の頭蓋（SX157）も出土した。

所属時代は、伴出遺物や層序関係などに関する検討によって、12～13世紀の人骨と考えられている。

なお、計測はMartin-Saller（1957）に従い、性判定には中橋（1988）を援用した。

結果

1. SX223号

木棺墓に埋葬されたもので、副葬品として、足下から土師皿が出土している。また、頭部近くからは魚骨も検出された。頭蓋の他、左右上肢、右大腿と下腿骨、左大腿骨、左右寛骨、及び下位脊椎や肋骨の一部の遺存が確認出来る。

体軸は東西方向に置かれ、頭を西方に向かって仰臥伸展葬と見なされる。顔面を右（南）に向かって、上肢は左右とも体側に沿って肘を伸ばしている。下肢は左側については確認出来ないが、少なくとも右側で判断する限り、膝関節を伸ばした伸展位で埋葬されたものと考えられる。保存状態は悪く、形態的な特徴は殆ど不明であるが、眉間部の突出が確認され、四肢骨体の太さから判断して、男性の可能性が高い。歯の咬耗がかなり進行し、縫合の一部に癒合も見られるので、熟年以上に達した個体と見なされる。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹		I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
M ₃	M ₂	×	P ₂	P ₁	C	I ₂	×		×	I ₂	/	P ₁	P ₂	M ₁	×	M ₃

(×：歯槽閉鎖、／：欠損)

一部にエナメル質減形成が認められるが、その程度は弱く、また、虫歯もみられない。

特徴

一部の上腕骨で得られた計測値を比較群と共に表1に示した。

表1 上腕骨計測値 (男性)

	5	中央最大径	博多157		吉母 ¹⁾		青木 ²⁾		天福寺		九州 ³⁾	
			(中世)		(中世)		(近世)		(近世)		(現代)	
			N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
6	中央最小径	18	20	17.6	30	18.6	22	17.7	106	16.9		
7	骨体最小周	-	20	62.5	28	67.1	22	63.8	106	61.8		
7a	中央周	72	20	66.1	30	70.0	22	66.5	106	63.7		
6/5	骨体断面示数	72.0	20	78.1	30	77.3	22	77.6	106	79.1		

1) 中橋・永井(1985)、2) 中橋(1993)、3) 専藤(1957)、溝口(1957)

上腕骨はやや太く、骨幹に扁平傾向が認められる。保存不良のため明確には確認出来ないが、三角筋粗面の発達が良好だったことが窺える。ただ、大腿骨では粗線部の発達が弱く、その断面示数は100に達しない。

人骨検出時の計測によって大腿骨最大長がおよそ400mmであったことから、156-157センチ程度の、かなり低身長の男性であったものと推察される。

2. SX157号

頭蓋のみ検出されたもので、埋葬施設は明確ではない。下顎の他、第一頸椎が確認出来る。

頭蓋各部の遺存は確認出来るが、保存状態が不良のため、その特徴については不明である。ただ、眉間部の発達、乳様突起、外後頭隆起などの発達が弱く、歯のサイズも小さいことから、女性であった可能性が高い。咬耗はかなり進行しており、熟年以上に達した個体と推測される。

以下に残存歯を示しておく。

○ M ² M ¹ P ² P ¹ ○ I ² I ¹	I ¹ I ² △ ○ ○ △ / /
M ₃ M ₂ M ₁ △ P ₁ C △ △	○ ○ △ △ P ₂ M ₁ M ₂ ○ (×: 歯槽閉鎖、/ : 欠損)

エナメル質減形成は殆ど見られない。

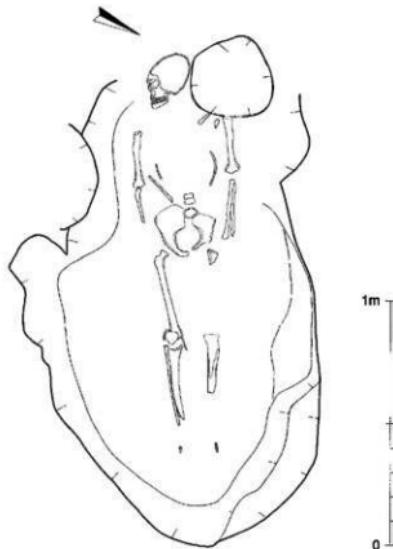
この頭蓋については、下顎、及び上位頸椎を伴うことから、一応は首を離断した事例である可能性も考えられる。保存不良のため傷の有無は確認できず、また埋葬か否かも確認出来ないが、上位頸椎を伴う頭蓋だけが検出されたということは、少なくとも他所に埋葬された遺体から頭蓋だけが移された事例（二次葬？）である可能性は少ないと見えよう。

まとめ

博多遺跡群157次調査によって、2個体の中世（12—13世紀）所属の入骨が出土した。いずれも保存不良で詳しい特徴は不明だが、SX223号男性は、比較的屈強でかなり低身長であったことが窺えた。また、歯冠の観察所見では、いわゆるストレスマークの出現が微弱で、少なくともこれらの個体については比較的良好な生育環境での生活が想定された。これが博多という都市部の住人の一般的の傾向か否かについては今後の検討を待つ必要があるが、非都市部住人との比較をすれば、中世期の生活、社会背景を考える上で興味深い知見が得られることが期待されよう。

文 獻

- Martin-Saller (1957) : Lehrbuch der Anthropologie, Bd.I, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
中橋孝博 (1988) : 古人骨の性判定法、日本民族・文化の生成 (水井昌文教授退官記念論文集)、六奥出版
中橋孝博 (1993) : 福岡市芦田青木遺跡出土の弥生・近世人骨、福岡市埋蔵文化財調査報告書356、福岡市教育委員会。
中橋孝博・永井昌文 (1985) : 山口吉母浜遺跡出土人骨、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
津村勝男 (1957) : 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」、人類学研究 4。
中原時義 (1957) : 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究 4。



SX223 人骨実測図 (1/20)



SK223 人骨検出状況（北東から）



SK223 頭骨周辺（北東から）

報告書抄録

博多118

—博多遺跡群 第157次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第988集

2008(平成20年)年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 西日本新聞印刷